【資料紹介】

有賀長伯判歌合〈翻刻〉上

日下幸男

はじめに

江戸前期の堂上派地下歌人有賀長伯（寛文元〜元文二年〔一六六一〜一七三七〕、七十七歳）については、すでに拙著『近世古今伝授史の研究　地下篇』（新典社、一九九八）において詳しく論じたところであり、地下の宗匠として門人詠草に添削をほどこすなどの活動についても少し紹介しておいた。しかし歌合判者としての活動については触れることがなかったので、小稿で長伯の正徳期の歌合資料を紹介してみたい。該書は天下孤本か。

一、略解題

長伯の伝については拙著に詳しいが、抜粋して略伝を最初に紹介したい。

有賀氏。諱泰一。号は長伯、黄和、以敬斎、無曲軒。法名徳建院以敬斎長伯正貞居士。本姓佐々木、戸田氏、母方の氏有賀を名乗る。父戸田道純は越前にて医業をなすも長伯これを厭い、京師に移り望月長孝の歌門に入る。ほどなく長孝没し、高弟平間長雅の門を敲く。長伯この道に執心深く、遂に長雅より古今伝授を受く。長雅より貞享五年一月『詠歌大概安心秘訣』二巻、元禄二年『詠歌大本秘訣』三巻五帖を附与される。のち長雅粟田山閑居の年、勢州の

中西信慶に入門の誓紙を呈す。三年有余にして信慶没す。和歌宗匠として身を立て、啓蒙家として多くの著述をなす。長雅らの勧めにより若くして『世々のしをり』一二冊・追加一冊（貞享三年）を端緒として、『秋の寝覚』一冊（元禄五年）、『初学和歌式』七冊（元禄九年）、『歌林雑木抄』八冊（同年）、『浜のまさご』七冊（元禄十年）、『和歌分類』七冊（元禄十一年）、『和歌二葉草』五冊（元禄十三年カ）、『和歌八重垣』七冊（元禄十三年）など、陸続として上梓する。故にその門弟都鄙にひろまる。門人知友とよく歌の筵をのべ、住吉大社を始め諸社に百首を奉納する。師の労を助け『片岡山』『富緒川』都合九冊（元禄四年）、『住吉社奉納千首和歌』四冊（宝永六年）などを編む。家集に『無曲軒長伯家集』二冊、『秋葉愚草』一冊がある。他に『和歌麓の塵』は没後長収により寛政十二年に上梓される。門人に川井立節、角谷正雅、小西宗武、浅見豊治、内田宣儔、長谷川兼値、上田歳信、円山賀納、生駒永言、長谷川貞篤、道工彦文、山中宗羽、辻経定、浅井矩永、西村長徳、田中長節、羽間重義、鈴木元亮等がいる。長伯嗣子長因を始め、長収・長基・長鄰ら、代々家学を継承すと雖も、青藍の誉れなし。

次に該書の書誌を記す。袋綴一冊。表紙題簽に「歌合長伯判　全」とある。縦二三・八、横一六㎝。墨付三八丁。一面一〇行、歌一首一行書。奥書識語なし。冒頭に「蘆隠清玩」の朱印。江戸後期写。転写を経たものか、誤写の訂正なども見られる。

表見返しに近代の筆にて「西山亭五番歌合、羽間氏亭冬六番歌合、岡西氏亭春十二番歌合、名所十二番歌合」（朱）、「立節ハ川井氏ナル可シ。川井桂山（称立牧）ノ考也。和歌ヲ好メルコト桂山墓誌ニ出ツ」（墨）とある。四種の歌合からなり、成立年代は正徳四年から五年にかけてである。一覧で示すと左の如くである。

①正徳四年午十月二日西山亭五番歌合（宣辰、宗貞、恒高、重義、風鵠、隆吉、安延、立節、正春、種元）

②正徳四年十二月二日羽間氏亭冬六番歌合（隆吉、宗貞、宣辰、種元、恒高、安延、正康、重義、風鵠、正春、立節）

③正徳五年正月廿七日岡西氏亭春十二番歌合（正康、恒高、宣辰、近良、種元、重義、安延、正春、隆吉、宗貞、風鵠、正春、安延、重義、隆吉、宣辰、恒高、宗貞、立節、正康、風鵠、近良、種元）

④名所十二番歌合（種元、立節、宣辰、正春、隆吉、重義、風鴿、近良、安延、宗貞、恒高、正康、種元、正春、風鴿、重義、隆吉、正康、恒高、宗貞、宣辰、立節、安延、近良）

右の歌合歌人の中には、拙著に名を見る坂上宣辰、岡西宗貞、羽間重義、岡風鴿、渡辺隆吉、川井立節、渡瀬正春、寺井種元、足立近良等もいるが、名を見ない恒高、安延、正康等もいる。

坂上宣辰以下の伝の紹介は拙著に譲る。歌合の難陳・判詞の分析などは後考に待ちたい。

二、凡例

一、『歌合　長伯判　全』一冊（個人蔵）を底本とし、これを忠実に翻字する。

一、紙幅の都合で本輯には前半を収め、後半は次輯に譲る。

二、漢字仮名については通行の字体を用いる。

三、判詞等については句読点を付す。

四、誤写の訂正部分については訂正本文による。

五、二字以上の踊り字はもとの漢字仮名にもどす。

三、翻字

正徳四年午十月二日　西山亭五番歌合

一番　　秋夕雨

左　持　　宣辰

荻の葉や時雨ゝ雨に音かへて風はよそなる秋の夕くれ

右　　宗貞

あはれさや秋の夕は人とはて淋しく過るむら雨のそら

右方人申云、左歌荻の葉風を雨の音に聞かえられたる趣向は、さる事に候へとも、秋の夕の詮いひおほせられても聞えす候。又第二句時雨の雨とはふるくも詠し候得とも、時雨る雨とは聞なれす候。

左方人申云、右歌第三句人とはての言葉、山里の居所なんとなくてはいかゝしくや。

右方陳云、人とはてとはかりいひて居所をいはさる証歌あまた有之候。道助親王の歌に、問人もあらし吹そふ深山へに木のは分来る秋のよの月と候得は、左の難には及ましくや。

判云、左の歌、風はよそなる、よろしく聞え侍るを、右方

人、しくるゝ雨の難、頗る相当歟。荻のはやのやもしもすくのやにて、心はたかはす侍れと尚有へく聞え候。秋の夕の詮の事、さしてよせおもくは聞え侍らねと、秋の夕と出たる題には少し替りて、雨をそへたる題なれは、雨の詮たちなはさても侍るへし。ことに荻の葉風を雨に聞かへたる夕のさま、感なしともいひかたく、所詮一二句尚あるへくや。右歌左方人、居所ならて人とはての詞いかゝといへる難に、右方人陳、さることに候。不及証歌例多し。尤居所をよせたるほとには侍らねと、証例あれは難には及はし。たゝし哀の詞、古来歌合なとには多とかめたる詞に候。此歌の哀も好ましからす候。左右ともに思ふ所侍れは、勝負申かたく。

二番

左　　恒高

夕されは身の毛しほれてゐる鷺の田面さひしき秋の村雨

右　勝　　重義

ふかゝらんあすの紅葉の色はあれと夕身にしむ秋のむら雨

右方人申云、左の歌申むねなし。

左の方人、申むねなし。

判云、夕の雨に鷺のみの毛のしほるゝさま、さひしく聞ゆ。されと夕されは毎夕にわたる心持あり。さしむかひたる夕の心のみにあらす。其上、夕されはと初五もしに出たるはかりにて、一首夕にかきらぬ歌也。前の荻の歌は、方人難せられ侍れと、荻の風は夕の感情を詮にする物なれは、おほく夕をよせたる歌あり。されはゆふへの詮もゆるくとは聞えす。此歌の夕はゆるき侍るへし。あす紅葉は思へと此夕の雨たへかたきは、尤に候。身にしむの詞や風によせたる程には侍らねと、上句のくたりよろしくいひとゝのへられ侍れは、右に加勝字。

三番

左　持　　風鴿

鶉ふす茅原の床も打みたれ雨にしほるゝ夕くれの声

右　　隆吉

降雨に荻の末葉も打しほれ窓しつかなる秋の夕くれ

右方人申云、左歌上の句は何とやらん、ことこと敷聞え候へとも、下の句させるふしも聞えす。夕暮の声も初句へ遠く、うつらの声とは聞へすや侍らん。

左方陳云、雨にしほるゝ夕暮のこゑといはゝ、鶉の声ならて何の声なるへきや。証歌記に不及。

左方人申云、右歌させる難なし。されと初五文字尚可

有や。

判云、左鶉ふす茅原の雨、暮いかさま淋しき体に聞ゆ。右方人の難、さして相当とも聞えす。上の句さのみことことしく聞え侍らす。上句風情有けにいひ出たれと、下にさせるふし聞へすとの難歟。されと殊外にはなれても聞えぬにや。声程遠しとの難、此儀は物によりて此難有事、古き歌合にも侍り。されと此歌はさのみも聞へす。うたによりてのこと成へし。右荻の葉も雨にしほれて窓しつかならん。夕の雨、是又感無にあらす。左方人、初五もしの難これも相当とは聞えす。左茅原、右荻葉ともになそらへて持なとにや。

四番

左　　安延

物思ふ身にしあらねとうき秋の夕の雨は袖ぬらしけり

右　　立節

いひしらぬ秋の哀や草の戸の雨に聞ゆる入相のかね

右方人申云、左歌物思はぬ身にも秋のならひにて、雨ならすとも袖はぬれぬへし。其外さして雨の詮聞へす候。又題の文字一所にあつまりて、いさゝか無念か。

左方陳云、たゝ秋の哀にも袖はぬれなん。されとも夕

の雨によせてこそ尚しも袖をぬらし侍ん。題の文字も上下ふかゝり侍れは、くるしかるましくや。

左方申云、右之歌申むねなし。

判曰、左歌雨の詮つよからすといふ難に、左歌陳を被致て侍る。一ことはりは聞えたる様に侍れと、此四句夕となれは、袖ぬらしけりとありても難なからんか。然は雨のよせは薄しと申さんにも、遠からぬ難也。袖ぬらすは秋の名目なれは、雨のよせに成て、ならさる一句也。陳にいへること、只秋の哀にも袖はぬれなん。雨によせて尚といふ心とは申され侍れと、此上句は陳の詞ほとには、ことはり聞へす。物あつまりたるとの難、第三に秋と置て下句に夕雨と侍れは、此難のかるへし。右歌是又雨の詮つよからねと、よくうつりたる故か。雨ゆるくとも聞へす。されは方人の難もなき成へし。一二句や今少可有やと覚ゆれと、雨に聞ゆる入相のかね、聞まさり侍るにこそ。

五番

左　持　　正春

夕つくひ残りてうすき浮雲にむら雨そゝく岡の葛原

右　　種元

草葉にもあらぬ我身も降雨にたもとしほるゝ秋の夕暮

右方人申云、左歌難なし。

左方人難云、右歌露にてこそ草葉にもあらぬ、本歌の詮立へきに、此題に一首の仕立いかゝ。

判曰、左上句風情有。右又上句感有。されは右歌露にてこそ本歌の詮立へけれとの難、愚意心得かたし。露にしほるゝ草葉は、雨にしほれん事は尚以也。さのみ本歌にまつはるゝのみを、歌の本意とせす。しかし下句よはくきこへ侍るにや。愚案には心しほるゝと有度也と覚ゆ。其故は衣も身にそふ物には侍れと、我身もといふには、外物ならぬ心をしほらせなは、心詞につよくて可然也と覚ゆるは、例のひか耳にても侍らん。かく左は右よりつよく聞ゆれと、これは又風情にのみひかれて、秋の詮たゝさるを俄に思ひ出て、岡の葛原出たりと聞ゆ。いかにも葛余りて、より所なし。浅茅やうの同し事にて、耳にかゝらす候へと、作者は秋もたしかにと思ひかへしたる、葛のは詮たらぬこそ恨なれ。又秋の日影はうすきよし読れは、第二句のうすきに秋の心有といはんとすれは、是は浮雲にてうすくといひなしたれは、其儀も返てむつかし。よしや秋のよせ一首の風情に有にてもあれ、葛はさし出たる物也。左右ともにとりとりに、右はよくいひくたされ侍れと、下句よはく、左は風をなしたれと、葛原愚意に不落、仍ていつれにもよりかたくこそ。

正徳四年十二月二日　羽間氏亭冬六番歌合

一番　　月前落葉

左　勝　　隆吉

風冴て空は隈なくはるゝ夜も落葉に曇る窓月影

右

木からしに月も更行紅葉ゝの散かひみたる色そさやけき

右方人申云、左歌落葉にて月の曇る、うらめしく聞へ侍る。落葉の詮も薄く、題も下句に集るもいかゝ。

左方陳云、右方難に落葉にて月の曇るうらめしくと侍れと、窓にうつる月の落葉に曇るをこそ、落葉のふかき詮にいへる也。題下句に集ると候へと、上句皆下の句の縁の詞にて出候へは、題下句に集りたるとの難には及ふましくや。

左方申云、二三句のつゝき、いかにそや聞え侍る。又散かひみたるの詞、頗新造とや申さん。散かひは、ちりかふ也。乱るとつゝけたるは、重詞にや侍らんと覚へ侍る。

右方人陳云、散かひみたるなと重ね詞、常の事也。

判云、左歌右方人の難、いつれも心得す。陳頗相当か。月前の落葉に候へは、落葉の詮も立てんとて曇らせたる、陳にいへることく一作也。又曇るといへはとて、雨に曇る様に月の照をうしなふにあらす。又題のかたよる難、惣して結題は上下にわくるといへる事は、題の心を上につくしぬれは、なにとしても下よはるなり。又上に題をつくして、いはんことの無まゝに、下の句あらぬ事をいへる例、古き読方の抄物にも見へたるにや。下よくいひたてつれは、上にかたよれるも作例多し。されと結ひ題の格にはつれ侍れは、是は歌合なとには、殊に心遣ひすへき也。上よりよくいひくたして四五句にあるは、さのみ申さぬ事に候。但し第五句ことにいひつゝめたるはせはしく聞へて、歌合杯には心得へきにこそ。右歌散かひみたるの難、いかさまちりかひも畢竟乱るゝなれはことくとく、よしとは聞へねと、陳のことく同し詞も重ぬれは、散かひとみたるとは心は同しけれと、同詞とも申かたくや。されと上句のつゝけから、句ことに前後みたれて聞え侍るにや。尤すくさまに云へき詞を、曲なけれは前後に云を、顚倒の格といふ。其格にもあらす。木からしに月も更行とは、いかにつゝけたるにか。更行紅葉ゝとうつりたるも、とゝのふらすきこゆ。たとへは木からしの音も寒行冬の葉の、月に散かふなとゝや申侍らん。左歌さはやかにとゝこほらす、景気もおかしよき、歌合の歌成へし。仍可勝にこそ。

二番

左　勝　　宗貞

月影もにしきをくゝる立田川みむろの山に嵐ふく夜は

右　　宣辰

冴し夜も月の桂の里近きあらしの山は木の葉時雨ゝ

右方難云、左歌落葉の底も月のくゝる如何。其上秋の風体と見へて、冬の季の詞もうすくや侍らん。

左方陳云、右方人の難、落葉の底を月のくゝる如何と侍れと、月影の立田川に移りて有夜、落葉のあやにくに降かゝるを、さなから月のくゝる様に見たて侍る、此歌の一作にてこそ侍れ。又冬の季すくなしと候へとも、川の落葉、秋の季といへる事、心得られす候。

左方申云、右歌一首さる事には聞へ侍れと、初句の詞一首へのりても聞えす候。殊更もの字なとうきてきこへ、一首の落着おほつかなくや侍らん。結ひの句もすこしつまりてや聞へ侍らん。

判曰、左歌古き事にて侍るを、月をくゝらせたるにて、風

情あらたまり、下句みむろの山にあらし吹よはといへる、長ありてよろ敷聞へ侍るを、月のくゝるいかゝとの難、影の事とは聞へさるにや侍らん。麁忽の難に候か。又一首秋にまかふとの難、是はさる事にて、陳に川の落葉を秋の季といへる、いかゝと申るゝ条、是さるへし。しかれとも落葉と打まかせていへるは、冬なから又秋のもよみたれは、此難風情の秋にひかるゝよしいへるは、理なきにあらす。則此本歌古今集秋の下に入て侍る。是其詮也。結句風寒る夜はなと申へきにて候を、又それにては嵐吹夜はには、いさゝか長劣侍るへし。仍老るに落葉の歌に秋めかしき歌も作例多侍れは、冬といはゝ冬にて侍らんかし。右歌桂里のはるゝよも嵐山は木のは時雨ゝ体、景気よく取合されておかしく候を、作様いかゝそや、いひとゝけす聞へ候。左の方人の難のことく初五もしのむつかしき成へし。いか様、作様のあるへき歌也。左月をくゝらせたる景気一首仕立、長も有て月の面影おかしく、木のは散増ると覚ゆるに、又一思ふ事侍り。惣して題をまはすに体ある物は廻さす、用の字は必思はせてよむ習也。此歌紅葉にまかふ所はなけれと、体ある紅葉を思はせたる、歌合には心懸りに候へとも、此作者の初て思はせたるにあらす。本歌よりして紅葉をあらはさねは、其例にゆすりてさても侍らんかし。此番右の歌も風情は思ひよられ侍れと、一向句作とゝかす候。左歌はなにくれと申す事は侍れと、体まさりたるによて、判者さまさま申なためて加勝字。

三番

左　持　種元

木からしの吹しく庭は影冴て落葉かうへに有明の月

右　恒高

から錦月やとれとや時雨せし露なから散庭の紅葉ゝ

右方人申云、左歌第二句庭はのはもし、口にさはるやうにや侍らん。

左方申云、右歌初句のから錦、ふと出たるやうにや侍らん。勿論末に紅葉ゝとは候へと、錦の縁語も外には聞へす候。又月宿れとやと候も、袖露なとにこそあれにし。宿れとは相当とも聞えす候。時雨せしとは候へと、つゆなから散なと暮秋の歌なとのやうにや侍らん。

判云、左庭はのはもしの難、尤に聞え候。披講の時なと必吟あしく耳にさはる事也。にもしにて下のうつり可然を、第四句のにもしをさけて、はとをけるにや。右から錦の難、頗相当か。月宿るの詞、袖の露にやとるの難は心得す。紅

葉の露に申ともなにの難か侍らむ。又秋の風情にひかるゝの儀、前に申畢。殊に時雨せしなとも侍れは、冬なるへし。左は一首題の心をいひたるはかりに候へ。させる思ひ入も聞えす。右は一風情有といへとも、から錦たち入て詮なし。かれ是思ひくらに、左はてにをはの難はかりにて、難かろけれは風情も又かろし。右は風情まさりたれは、一句の難重し。仍而なそらへて持と申畢。

四番

左　安延

空はれて時雨せぬよは月に又木の葉をさそふ庭の松風

右　勝　正康

風誘ふ山の木のはの散行もさやかにみする峯の月影

右方人申云、左歌下句不珍也。

左かた申云、右歌申むねなし。

判曰、此番、左は時雨せぬよも木のはにかつ曇らせ、右風にさそひ行紅葉を月の影にて見たる、相共に風情無にあらす。されと左松風たゝ風にてあるへきに、松不入もの歟。下句もいかさま上に対してはことなく聞え候。右歌左方人申むねなきよし申さるゝにつきて、勝と申侍らんか。

五番

左　持　重義

正木散音はかりして霜寒き月の枕に山風そふく

右　風鴿

散まよふならの習ひに音たてゝ月さはかしき木隠の宿

右方人申云、左歌申むねなし。

左方人申云、右歌一首思ひ入られて詠せられ候とは聞へ侍れと、ならのならひの詞、さしてよき重詞とも聞へす候。月さはかしき風なとも、ほしくや侍らん。月なともふとさし出たるやうにや。

判云、左正木散音はかりしての一二句、下にかけあはせていかゝ。古歌にも、日暮れはあふ人もなしといひて、嵐の音はかりしてとかけあはせたるにて、はかりしての詞とりあひよろしく聞え候。霜寒き月の枕といふには、なにとやらむ都合せす侍る歟。右ならのはの散覧木影の宿は、月さはかしきよしいへる、いかさま景気はさる事と覚え侍れと、左の方人の難、一々相当におほゆ。其上詮と詠せられたる第四句の詞、風体心よからす。されは又此つかひもいつれとも申かたし。

六番

左　勝　正春

見し秋に思ひまさりて淋しきは木のは散よの庭の月影

右　　立節

釣簾の外や夜渡る月に風冴て積る紅葉も又さはく也

右方申云、左歌一首面白侍るを、題の文字下句に集りたるや無念歟。

左方申云、右歌一首はよく聞へ侍れと、初句下へやりても聞えす候。

判云、木のは散よの庭の月影、させることなき物から、詞しなやかにくたりて、なにとなくよろし。右又つもる落葉も又おかしく候を、初五もしの難、いか様詮なく聞へ候。無念と申へし。尤こすの外の景気なれは、仕立によりて風情とも成へき物の、こすの外やといひすてたるにて、詮なく聞ゆ。左右方人面白よしをいひ、愚意にも歌合にはよきころの歌と覚れは□勝。

（つづく）